

私を支えてくれた3つの柱

竹宮 孝子

東京女子医科大学・総合研究所・研究部

略歴

1990年	東京女子医科大学卒業・医師免許取得
1992-1995年	同大学院内科系修了・医学博士取得
1997-2006年	同第一生理学教室助手
2000-2002年	(財)東京都医学研究機構・東京都神経科学総合研究所 へ国内留学
2003年	同客員研究員兼務、学習院女子大学非常勤講師兼務 (人間関係論Ⅱ「母体の健康と育児」)
2006年	東京女子医科大学 総合研究所研究部講師

医師の働き方が大きく変わりつつあり医師不足が問題となる現在、「女性医師の活躍」に期待が集まっています。しかし、子育て中の女性医師が仕事を続けるということは、これまで多くの先輩方が悩みながら取り組んできた難問であり、決して容易なことではありません。見方を変えると、それほど難しい問題だからこそ、何かが変わらなければ「もっと働きたい女性医師」が増えることは難しいことなのかもしれません。

一方、育児はとかく仕事と正反対に位置するもののように扱われがちですが、本当にそうなのでしょうか。「子育てと仕事のどちらをとるのか?」ということに悩んでいる話を聞き、「子供がいるから仕事ができない」「子供のために仕事を辞めた」というような内容の話を耳にするたびに、私は少し違和感を覚えます。それはおそらく私が子育てから忍耐や責任感を学び、それらが仕事にとっても役立っていると実感しているからだと思います。しかし、現実問題として子供が小さいうちは育児に時間がかかることは確かですし、もし自分一人で育児を何とかしようと考えていたら、私にとっても子育てと仕事は対立する関係になっていたかもしれません。これまでを振り返ると、至誠会保育園、家族、シッターさんなど多くの方々が育児を助けて下さり、職場の皆さんが育児を理解し協力してくださいました。育児で一番大変な乳幼児期、小学校低学年の学童期を様々な形で支えて頂いたお陰で、私は子供との良い関係を維持しながら仕事を続けることができたのだと思います。

また、臨床から基礎研究へ転向し、研究をスタートし発展させることができたのは、まず私に研究をしたいという意欲があって、そこに女子医大そして至誠会の多くの先生方と東京都神経科学総合研究所の皆さんが、たくさんのチャンスをくださり応援して下さいましたからだと思います。特に大学以外の職場で仕事できたことは、これまでにない貴重な経験となりました。その中で、周囲のスタッフに育児を理解してもらいながら仕事をスムーズに進めるためには、私から始めなければならないことがある、ということに気づいたことは大きな収穫でした。本日は、そのような支援を受ける女性医師側の自覚も含めて、子育てをしながら研究を続けてきて良かったことをお話したいと思います。また、若手研究者の方々に向けて、できるだけ具体的かつ実践的なアドバイスもしたいと思います。今後の女性医師には、子育てや仕事に対して柔軟な考え方をもち、かつ支えてくださる周囲の方々への配慮を忘れず、その上で充実した研究者支援を受けて、積極的に仕事に取り組んでもらいたいと思います。そして、これからの女性医師にとって、大学で研究者として研究と教育を続けることが1つの選択肢となることも願っています。